

# 保育学事始め

松沢 孝博

「保育学事始め」という題を頂いた時にタイミングのいい、私のための題のようにも思えたのです。つまり、今まで私は保育のことに関わることで発言をしたり、書いたりしても自分の気持ちの中ではいわゆる心理学を大いに引きずっていたのですが、保育というものを過去の事に囚われる事無く考えていくことができると思い始めているからです。しかもやっと辿りついた感がするのです。そして長い時間

を経たために感慨のようなものすら浮かんでいます。といいますのは個人的なことで恐縮ですが、大学の学部・大学院の課程で時間をかけていわゆる科学的心理学の方法論を学んだものでした。それがまた高校とは異なり大学生としてのアイデンティティーを産み出す働きがあったと思われます。それ故何の疑問を抱くこともなくその方法論の精緻さを追及し、その面白さも感じ始めていました。ところが自



発的にかかわりをもつていた学童保育の子どもたち

とのかかわりや、当時の恩師の研究（施設で生活し

ている人々を対象にした研究）の下働きを通して、

心理学の研究方法はこれでよいかと疑問を持ち始

めたのです。つまり心理学の方法論を通して子ども

を見ていくと実際の子どもたちと何か仲良くなつきあ

えない。また研究者が何と言おうと被験者というの

は研究者の知的好奇心の対象であり、研究の材料で

しかないのではないか。被験者である子どもや人び

との人生に研究がどのように影響を与えてしまうの

か、研究者の被験者に対する責任の問題はどうなる

のかなど頭を巡り始めてきたのです。そしてむしろ

実践現場だからこそできる研究、実践現場でしかで

きない研究もあるのではないかとも考えたのです。

しかし様々な研究を見ても実践現場独自の研究はほ

とんどなく、現場の人の研究でも方法論は大学研究

者の真似であったり、研究は研究、現場は現場と

はつきり区別している人などいわゆる科学的方法論

にのつとつとされている研究がほとんどでした。

さて大学を出て乳幼児と共に生活していく仕事に

就きましたときに、意外にもいわゆる心理学の方法

論は毎日の子どもとのかかわりのなかでは生じてき

ませんでした。むしろ子どもたちから“ぼくを見

て” “私自身を見て” と教えられ、また子どもとの

かかわりで困った事が生じた時、その子どもを良く

見ていくことが大切であるということを子どもたち

から教えてもらいました。ところが、何かまとめて

研究として発表することを考えると、どっぷり漬

かっていた方法論つまり、仮説は？ 公共性は？

客観性は？ 検証可能？ 一般化できる？ などの

スクリーニングが立ちはだかり、更にそれは主観的

であるといつて一蹴されることが恐ろしいこともあ

り作業は進まないわけです。もつとも研究作業が進

まないことの言い訳だったかもしませんが。この

ように一旦研究とか学問として考えると科学的心理

学の方法論が頭をもたげてしまい、しかも自分自身

の中にある疑問を押し潰して、科学的方法論を用いて子どもたちの事を考えると、様々な研究が仮説的に生まれてくるわけです。そして心理学という分野

の片隅で生きしていくのならしょうがないとも思い始めてしまうのです。しかし心の底にある疑問を呼び戻すとそれは大きな渦巻きが生じたり、どちらの方に向でいこうかと迷い、行きつ戻りつが始まるわけです。しかしわゆる科学的な方法論ではない方の方法論といつても明確な形で自分の中にあるわけでも

なかつたのです。現場での年数が増えるに従い、少しずつ科学的方法論に対するこだわりが薄れていくのが分かるのですが、心のどこかでこだわっている部分を消すことが出来ないでいました。そういうわけで現場で年数を経ながらも年数だけを経てしまつたというわけです。

ところが新しい年度になってほとんどこだわりを持たなくなっている自分に気づき、正に過去にこだ

わりのないところで保育について考えていくことが出来るようになったと思っています。そういうことから私にとつて事始めであると思うわけです。

さてここでは具体的に保育学・保育論というようなものを創りあげていくことにふれるのではなく、それを創りあげていくにあたり大切に考えておきたいことを、自分の中に確認するためにも幾つか述べてみたいと思います。

#### かかわりを楽しむ中に生まれる保育学

子どもは一人で生きているわけではなく、身近な大人と共に生きしていくわけです。例えば赤ちゃんがたまたまお母さんに笑いかける。するとお母さんはそれに引きずられるように赤ちゃんに笑いかけると、自然に相互のやりとりが成立して、互いに生きていくエネルギーのようなものをそれぞれから受け取っていくのでしょうか。子どもが「立つ」ということを見ても、子どもの「立つ」という意志

と立てる喜びを大人が感じて、それを喜び、子どもに返すことで、子どもは本当の意味で立つことが出来たといえるのではないでしようか。そこでは共どもが喜び楽しんでいる様子が見られるものです。この取るに足らないと思われるような小さなことがむしろ子どもを理解することにとても重要なことと思われます。なぜなら単に子どもの行動の成長的変化の一つが増えたというだけではなく、そこに見る子どもの意志や、それにともなう達成することができた自分自身の喜びや大人によって喜んで貰えたことで、子どもの世界をも変化していることが感じられるからです。そして子どもが喜んで欲しいのは、表面的に目に見える変化ではなく、むしろ子ども自身の嬉しい気持ちを感じて欲しい、一緒に喜んで欲しいと思っているのではないでしようか。

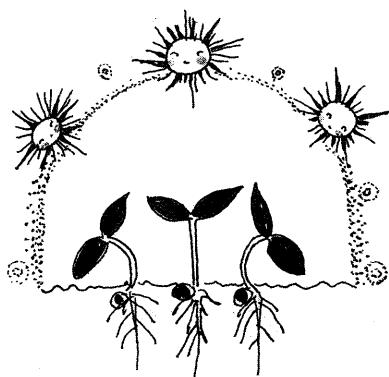
ところが暫く時間が経ち、私たち大人は子どもを前にして、ともすると、子どもの見えたる行動の数を増やすことに一生懸命になつてみたり、大人のい

うことをどれだけ理解できるようにするかについて心を碎くことが多いように思います。そこではおとなが絶対的立場のまま変わることなく子どもに向き合っていますので、おとなと子どもの間柄は、一方的に指示する—指示される・あるいはコントロールする—コントロールされる関係でしかなくなります。そこでは、子どもが大人の希望通りに行動したときのみ大人が楽しい嬉しいと感じるだけで、子どもの方は本当の意味で楽しさを感じることが少なくなります。ということはかかわりの中で相互に楽しむことが見えなくなつてくるということでしょう。そして、子どもに対する大人の理解や対応が一方的になるということでもあります。さらに加えていうならば、子どもの経験はさせられ経験でしかなく、子ども自身が自分自身の人生を自分なりに創り上げていく下地を、おとなが早い時期に子どもから取り上げてしまつていることにはならないでしようか。

先日実習先から帰ってきた学生が、保育者だから

何かをしなければならない、何かを教えなければならない気持ちを強く持つて子どもに向かっていた時には、子どもに対してイライラしたり、時には子どもから“先生怒つてばかり”と言われてしまふことがある、うまくつき合えないことを感じていたが、その時の子どもの気持ちを感じて言葉にして子どもに伝えると、特別何をしたわけでもないのに、子どもがこちらを向いてきて自然にかかわりがスムーズになり、辛く感じていた実習が少しづつ面白くなってきたということを、喜びながら報告してきた事が思い出されます。子どもとのかかわりが楽しいと感じられるときに子どもに対する理解が進み何をしたいかなどが見えてくるのでしょうか。

育者はその人々の協力者であつたり下働きであつたりすることが多かつたように思います。そして保育者の提示したものに則り保育が成されてきた面があるとおもいます。ですから保育ということは大事だといわれながらも、婦女子のかかわることであると



### 保育者一人ひとりの主体性・独自性から生まれる保育学

今までの保育学・保育論というようなものは大学関係者、もしくは専門研究者が創り上げ、現場の保

いって低く見られたり、男性がかかわりを持つことの抵抗感が根強くあつたように感じられます。つまりそれぞれの保育現場の主体性をもつてして保育が成されてきたというより、既成のものによって成り立つていたといつてもよいかもしません。ですから次のようなことが起こっているといつてもよいのでしょう。それは、幼稚園教育要領・保育所保育指針が改訂され、どうして良いか分からなくなつたとすることを保育現場からよく耳にすることです。保育者がそれぞれの保育所や幼稚園の特殊性を生かして自由に保育する度合いが広がっていることであるにもかかわらず、どうしてよいかわからないということは、本来その保育者が保育現場において主体的にかかわりをもつていなかつたということでしょう。あるいは保育というものが何かに従属的・寄生的にかかわっていたということかもしれません。ということは保育者自身も、させられ体験の継続の中で、子どもとのかかわりを通して発見の喜びや保育

の面白さというものを感じることが少ないといふ」とがいえるかもしません。さらにそのような研究者とかかわる子どもも、保育者とかかわる喜びや明日につながるエネルギーを獲得できないまま過ごすということでありましょう。

保育の置かれた位置から保育者の主体性・独立性を考えてみましたが、保育そのものをみると、次のようなこともいえると思います。保育現場は一人の主体である保育者が、一方の主体であるその子ども・その子どもたちと向き合い、かかわりあう場です。ですから保育者である“私はこのように思う”、“私はこのように感じる”ということを表現できるということでもあります。そしてそれを他の人に十分説明できるだけのものを用意することで、必然的に保育者の主体性・独立性が生じてくるということです。ですから保育者自身が保育学・保育論といふものを創り上げていくことに何ら障害があるわけではなく、むしろその材料は保育現場の中に無限に

有り、いつでも独自に創り上げられることが可能であるということです。それが大仕事のようにみえることでもあります。そこでの作業における発見や驚きから保育自体が面白く感じられるようにならへていくことでもあります。それでも勿論、別な面からの検討の用意は、恣意的にならないために常に必要なことがあります。そのためにもつぎのことが大切になってくると思います。

保育者間で自由に子どもについて保育について話し合うことから生まれる保育学  
子どもとかかわる保育者は、その保育者だからこそ感じたりする子どもに対する思いや問題意識があると思います。それはたとえ同じ保育所・幼稚園の同僚とでも、生きてきた歴史、保育経験、保育に対する理解や意欲が違うので当然のことでしょう。しかしそれには偏りがあることを含んでおくことも忘れてはならないと思います。それでもそれらを主觀

的であるといって切り捨ててしまうのではなく、子どもも保育者も常に心を動かしながらかかわっているのが保育現場であるので、むしろそれを保育者同士の間に公開をして検討を加え、共通理解を作り上げていくことが大切ではないでしょうか。なぜなら年長者や経験の長い保育者に合わせて主体性を放棄してしまうのはなく年長者も若い人も、経験の長い人も短い人も、それぞれが保育現場で感じることや問題意識を提示することや、他の保育者の思いや感じ方を聞いたり感じることによって、子どもに対する見方が広がったり深まったりするばかりでなく、保育者間の理解が増すことでもあるからです。それは実習に来ていた学生たちが遠慮がちに述べたことやささやかな感想が、子どもとのかかわりが変わるべきかけになつたり、保育者間の理解度が増したために協力がスムーズにはかられるようになったりすることは多々あることからも実感として感じることができます。もっとも表出言語が未熟な子ども

たちの心持ちを感じることが出来る保育者は、他の保育者のそれについても感じ理解することが出来るでしょう。しかしその共通理解ですら問い合わせられる可能性があることに關して、保育者は常に心を開いておく必要があると思います。例え時間がかかったとしても、それが固定してしまうと共通理解であるとしても、それは保育自体も硬直やマンネリを招く事になるときには保育自体も硬直やマンネリを招く事になるからです。

以上「保育学事始め」ということで述べてきました。

た。しかしよく考えますと、私自身が大学にかかるようになり、大学生を前に教えたり伝えたりすることを主な仕事としているために、知らず知らずのうちに自分自身の限られた知識や経験だけを嵩に、未熟な学生たちにということで、一方的に教え従わせることに快感を抱く権力者になつていることに浸りきってしまう危険性が常につきまとつてていると思われます。ということは、子どものことを考えた

り、保育のことを考えたりすることが、単に仕事の材料でしかなくなるということであり、まして子どもと直接かかわりを持つことが遠くなるだけでなく、むしろ子どもとかかわる時には加害者として立ち現れる可能性があり、図らずも、初めに批判した状態に自分自身が陥る危険性を含んでいるということもあるとも思います。そのように考えるところの機会が、子どもと向き合う姿勢や研究の姿勢について改めて考える機会になり、私にとって実質的な子ども学、事始めであつたといえると思います。

(四国学院大学)